マンガUP!新人漫画賞　コミカライズ部門

ファンタジー短編小説

『庭のダンジョンをコツコツ攻略し続けた中年リーマン、辿り着いた異世界で無双する』

著：九頭七尾

【キャラ説明】

■山田昇二（やまだしょうじ）
主人公。35歳で独身のサラリーマン。
身長178センチと日本人としてはやや高めだが、
異世界では平均的な身長。
本人にあまり自覚はないが、実は割と仕事ができる。

■津田課長
山田の直属の上司。42歳。
陰湿な性格で部下たちから嫌われている。
自分のミスを部下に押し付け、
逆に部下の成果を自分の手柄にするタイプ。

■エルティア
聖ミケルア王国の第二王女。17歳。
剣の腕に長け、姫騎士と謳われている。
第一王子との王位継承権争いの真っただ中。
実はかわいいものが大好きだが、センスが少し独特。

【本編】

「お疲れさまでしたー」

午後６時の終業時刻と同時に、俺、山田昇二は席を立った。

上司である津田課長の苦虫を噛み潰したような顔がちらりと見えたが、構わずフロアを出る。

この日は部署の飲み会が企画されていたが、適当な理由を付けて断らせてもらった。

給料をもらっていてもあの上司の相手をするのは苦痛だというのに、無給なんて絶対に御免だからな。

解放感に満たされながら最寄りの駅まで歩き、タイミングよく発車直前の電車に乗り込む。

今日は金曜日。俺のようなしがないサラリーマンにとって、土日を迎える今がきっと至福の瞬間だろう。

とりわけ三十代独身の俺は、この週末、誰にも邪魔されずに好きなことができる。

やることはもう決まっている。

ダンジョン攻略だ。

「前回はちょうどボスがいそうな部屋の手前で終わってたからなー」

ゲームの話ではない。親から譲り受けた築 50 年の家の庭に、なぜか突如として出現したリアルなダンジョンの話である。

家に辿り着くなりスーツを脱ぎ捨て、俺は半裸姿のまま庭に出た。

隠蔽用のブルーシートを取り除くと、そこには大人一人が余裕で通り抜けられるくらいの穴が開いている。

「さてさて、それでは攻略再開といきますか」

穴に飛び込むと、５メートルほどの距離を落下して地面に降り立つ。

軽々と着地を決められたのは、俺の身体能力が格段に向上したからである。

どういう原理か知らないが、このダンジョンの中にいる間だけ、俺は超人じみた身体能力になると共に、特殊なスキルや魔法まで使えるようになるのだ。

ダンジョンで手に入れた武器やアイテムもダンジョンでのみ存在することができ、俺はアクセス可能になったインベントリから武器と防具を取り出して装備する。

当然、初めてこのダンジョンに潜ったときはステータスも装備も最弱だった。

魔物を倒し続けてレベルアップし、強力な武器を入手することで、徐々に強くなっていったのである。

そう、魔物だ。

ゲームなどのダンジョンと同様、ここにも魔物が棲息している。

「ギギギギギギッ！」

「お、ゴブリンだ」

洞窟めいた通路の前方から、不気味な鳴き声と共に醜悪な見た目の魔物が姿を現す。身長はだいたい 140 センチくらいだろうか。初めて遭遇したときはマジでビビったが、もはや相手をするまでもない。

上層はこうしたゴブリンやスライムといったお馴染みの最弱な魔物から始まって、下層に進めば進むほど凶悪な魔物が出没するようになっていく。

俺が現在攻略中なのは地下 99 階で、ここの魔物の強さはゴブリンとは比較にもならない。

当然、99 階分も地道に潜っていては、この週末だけでは到底足りないので、

「テレポート」

俺は襲いくるゴブリンを無視し、転移魔法を使った。

視界が一瞬で切り替わり、気づけば人工的な通路に立っていた。真っすぐ伸びる幅広の通路で、両側にはクリーチャーのような禍々しい姿の彫像がずらりと並んでいる。

そして通路の先には巨大な両開きの扉があった。

「よし、時間通りだな。それじゃあ、配信を始めるとするか」

そこで俺はドローンを起動し、スマホを操作してライブ配信をスタートさせる。

「どうも、ヤマダです。今日もうちの庭にあるダンジョンの攻略の様子を配信していこうと思います」

庭に出現したこの謎のダンジョン。最初は普通に探索していたのだが、ふと思い立って数年前からネットで生配信してみることにしたのである。なぜかダンジョンの中でも地上と電波が通じるのだ。

ちなみに身バレを防ぐため、一応、頭をすっぽり覆うタイプのマスクを被っている。可愛らしいアヒルのマスクだ。

〈待ってた：コヨーテ〉

〈楽しみ：破壊神〉

〈今日はボス戦ですね！：さとうとごはん〉

すぐにコメントが入るが、彼らはいつものメンバーだ。

俺のチャンネルの登録者数はたったの 5 人。生配信中の視聴者は、ほぼ常連の 3 人だけで固定されていてそれ以上は滅多に増えない。

家の庭にできたダンジョン攻略なんて、本当はもっとバズると思ってたんだが……。

おっ、一人増えたぞ。しかも恐らく初見さんだ。

「初見さんこんにちは。こちらはリアルダンジョンを攻略していく配信になってます。楽しんでいってください」

〈リアルダンジョン？：カンパチ〉

「そうです。数年前うちの庭になんか急に現れまして」

〈そういう設定ってことですか？：カンパチ〉

「いえいえ、設定じゃなくて、ガチなんですよー。今から多分ボスと戦うことになるので、よかったら見てみてください」

〈なんでアヒル被ってるんですか？：カンパチ〉
「身バレ防止用です。アヒルなのは単に可愛いからです」
　見た目の割に実は防御力が結構高かったりする。
〈スーツなのは？：カンパチ〉
「普段はサラリーマンなので、この格好が一番気合入るんですよ。あ、もちろんダンジョンで入手した特殊な素材で作ったスーツですので、防御力はばっちりです」
　俺が身に着けている衣服は、見た目がスーツそのものなのだ。
　ちなみに俺は鍛冶のスキルも持っているため、自分で装備をクラフトすることが可能で、マスクもスーツも魔物の革製の靴もすべて自作である。
〈フェイク動画乙：カンパチ〉
　あ、視聴者数が一人減った。どうやら出ていってしまったようだ。
　まぁよくあることである。
　紛れもなく本物のダンジョンなのだが、みんな信じてくれないのだ。
　最近はＡＩの高性能化でフェイク動画が簡単に作れるようになったせいで、それと間違われてしまうのである。
「気を取り直してボス戦と行きますか」
　俺は重たい両開きの扉を開け、その向こう側の広大な空間へと足を踏み入れた。
　そこで待ち構えていたのは――九つの首を持つ巨大な多頭竜で。
「「「グルアアアアアアアアアアアッ！！」」」
「これはかなり強敵っぽいですが、頑張って討伐していきましょう」

「いやー、なかなか苦戦しましたね。さすがは地下 99 階のボスです。何度か危ない場面はありましたが、どうにか倒せてよかったです」
　地下 99 階にいた凶悪なボスは一筋縄ではいかず、撤退を繰り返し、５回目の挑戦でようやく討伐を果たした。回復系のアイテムもかなり使ってしまったな。
「気づいたらもう日曜日の夕方ですね。明日も仕事ですし、今日はそろそろ引き上げたいところですが……せっかくなのでこの階段だけ下りてみましょう」
　ボスを倒したことで出現した階段。これを前に回れ右というのは、さすがに見ている人たちも消化不良だろう。なお、視聴者は相変わらず常連の３人だけ。
「……さて、ついに地下 100 階です。大台ですし、何が待っているのかワクワクしますね」
　しかし階段を下りると、その先は重厚な扉によって閉鎖されていた。
「もしかしてまたボスが待ち構えている展開でしょうか？　……一応、中を覗いてみましょう。あれ？　うーん、開かないですね？」
　押してみてもビクともしない。ボス部屋の扉は総じて重たいが、開かないようなケースは今まで一度もなかった。

〈何か条件があるとか？：コヨーテ〉
〈押してダメなら引いてみる？：破壊神〉
〈強引に壊すのはいかがですか？：さとうとごはん〉
　コメント欄には三者三様の意見が。
「なるほど、ではひとまず壊してみようと思います」
〈さすがヤマダさんw：コヨーテ〉
〈パワープレイ最高：破壊神〉
〈冗談で言ったんですけど苦笑：さとうとごはん〉
　俺は扉から少し距離を取り、勢いをつけて扉に蹴りを叩き込む。
　ドオオオンッ！
「お、ちょっと凹みましたね。もう一回やってみましょう」
　それから何度も何度も扉を蹴り続けると、最後は扉ごと向こう側に吹き飛んでいった。
「ふう、ようやく開きましたね。なかなかしつこい扉でした」

◇　◇　◇

「エルティア様、間もなく祭壇に着きます」
「はい」
　従者に状況を教えられ、エルティアと呼ばれた彼女は小さく頷いた。
　美しいプラチナブロンドの髪に、端整な顔立ち。その凛とした立ち居振る舞いから明らかに高貴な身分と分かるが、今は緊張を隠すことができずに表情が強張っている。
　大陸でも有数の歴史を誇る聖ミケルア王国。
　彼女はその現国王の娘で、れっきとした王女である。
　姫騎士と謳われるほど剣の腕に長け、国民からも絶大な人気を誇る彼女は、もうすぐ 18 歳の成人を迎えるところだった。
　しかし王族が成人として認められるためには、伝統的にある儀式を経る必要があった。
　それが王国の草創期に作られたとされる古代神殿に赴き、そこで三日三晩にわたって祈りを捧げ続けるというものだ。
　彼女は今まさにその古代神殿の中を進み、最奥にあるという祈りの場――祭壇に向かっているところなのである。
「それにしても……本当に荘厳で神聖で……広大な神殿ですね。迷路のようになっていて、道順がまったく覚えられません。遥か昔にこんな壮大な建築物が作られていたなんて、俄かには信じがたい気持ちになります」
　幼い頃から幾度となく話だけは聞かされてきたエルティアだが、実際に足を踏み入れたのはこれが初めてのことだ。
　その感動を素直に口にする彼女に、従者は頷いて、

「はい。しかも今なお神聖な力を保っていて、それが魔物の侵入を妨げているというから驚きです。……ただ、さすがに長い年月を経てそれも弱まってきているのか、完全に魔物がいないというわけではありませんので、ご注意ください」
　三日三晩の滞在となれば、その間に魔物に遭遇する可能性も高い。神殿に施された魔物除けの結界を突破するような魔物は、得てして凶悪な個体であるため特に注意が必要だ。
　やがて祭壇の近くまで来たときだった。
「この重厚な扉は何ですか？」
　通路の途中に発見した謎の扉。両開き式のそれは硬く閉じられた上で、何重にも頑丈な鎖を巻きつけられており、物々しい気配を醸し出していた。
　宝物庫か何かかと思いきや、この古代神殿に詳しい従者の答えは予想外のものだった。
「それが……こちらは完全に開かずの扉となっておりまして、詳細は不明なのです。一説にはそこから超高難度ダンジョンに繋がっているとされていますが……昔の文献を調べても詳細は残っておらず、真相は分かっておりません」
「超高難度ダンジョンに……？」
「もちろん心配には及びません。この通りずっと閉鎖されたままで、ダンジョンの魔物が出てきたという記録はありませんので」
「そうですか」
　ふと嫌な予感を覚えたエルティアだったが、きっとこの成人の儀への不安感から来るものだろうと思い直し、すぐにこの扉のことは忘れることにした。
　そうしてついに一行は祭壇の間に辿り着く。
　やがて儀式が始まると、エルティアは一人、深い祈りの世界へと入り込んでいった。

　果たしてどれくらいの時間が経っただろうか。
「「「うわあああああっ！？」」」
「エルティア様！　エルティア様！」
「……っ？」
　祈りの世界に沈んでいた彼女の意識を現実へと引き戻したのは、背後から聞こえてきた悲鳴と自分の名を呼ぶ従者の声だった。
　祈りを中断し、振り返った彼女が見たのは一体の巨大な魔物。どうやら神殿の結界を突破し、ここまで入り込んできたらしい。
「ど、ドラゴンですっ……それも、サイズと強さから考えて上位種っ！」
「まさか、アークドラゴンですか！？」
　ドラゴンは幾多いる魔物の中でも、最強種の一角とされている。
　並みのドラゴンでさえ、討伐するにはベテランの騎士が10人は必要と言われているほど。
　上位種のアークドラゴンともなれば、精鋭である上級騎士を何人も用意しなければなら

ない。
　しかしこの古代神殿には、最低限の従者しか同行が許されておらず、戦える騎士はわずか数人。幸い上級騎士も同行しているが、たった一人だけだ。
　当然、騎士たちは劣勢だった。アークドラゴンが前脚の爪を振るうと、それだけで彼らの持つ剣や盾を砕いてしまうし、強力な尾の一撃は数人まとめて吹き飛ばしてしまう。
「エルティア様！　ここは一度、儀式を中断してこの場から避難しましょう！」
「わ、分かりました」
　それでもどうにか騎士たちがアークドラゴンの動きを封じている間に、エルティアは戦えない従者たちと共に祭壇の間から脱出する。
「グルアアアアアアッ！！」
　だがアークドラゴンは彼女たちの逃走を許しはしなかった。
　立ち塞がる騎士たちを蹴散らし、エルティアの後を凄まじい勢いで追いかけてくる。
「オオオオオオオッ！！」
「〜〜〜〜っ！？」
　アークドラゴンが大きく口腔を開いたかと思うと、そこから衝撃波のブレスを放ってきた。
　吹き飛ばされ、何度も地面を転がるエルティアと従者たち。
「く……みんな、大丈夫ですか……っ！？」
　上手く受け身を取っていた彼女はすぐに立ち上がることができたが、非戦闘員の従者たちにそんな真似ができるはずもなく。
「え、エルティア様……我々を置いてお逃げ、ください……っ」
「っ、そういうわけにはっ……」
　王族、そして姫騎士として、戦えない者たちを見捨てるなどできはしない。だがそうこうしている間にもアークドラゴンはこちらに迫ってきている。
　このままでは全員まとめて餌食になってしまう――
「……いいえ、可能性が低くとも、最後まで諦める気はありませんっ！」
　腰に提げていた剣を抜き放ち、覚悟を決めた表情で構えるエルティア。アークドラゴンを相手に、単身で戦いを挑むつもりらしい。
　と、そのときだった。
　ドンドンドンッ！
　突如として響いてきた爆音。一体何の音だとその発生源を横目で探ったエルティアが見つけたのは、ダンジョンに繋がっているというあの重厚な扉だった。
「向こう側から音が……っ！？」
　よく見ると音に合わせて分厚い扉が大きく歪み、鎖が引き千切れそうになっている。
「まさか、ダンジョンの魔物が出てこようとしているのですかっ！？」
　アークドラゴンに加え、超高難度ダンジョンの魔物まで現れてはもはや一巻の終わりだ。

ドオオオオオオオオオンッ！！
最悪の想像に絶望するエルティアの目の前で、凄まじい轟音と共に扉が吹き飛んだ。
そうして姿を現したのは――

アヒル人間だった。

「……えっ、ア……ヒ、ル……？」
身体は人間。しかし頭はアヒルである。
見たことのない生き物だが、魔物の一種かもしれない。ミノタウロスやオークなど、人頭獣身の魔物は少なくないのだ。
正直あまり強そうには見えないが、見た目に騙されてはいけない。
エルティアが警戒していると、
「ふう、ようやく開きましたね。なかなかしつこい扉でした」
アヒル人間が喋った。落ち着き払った、冷静な声だ。
「まさか……人間？」
よくよく見てみると、首のあたりに切れ目があった。あのアヒルの頭は被り物らしい。
それにちゃんと衣服を身に着けている。不思議なデザインだが、なんとなくフォーマルな雰囲気を醸し出していた。魔物がこんなにきっちりした服を着ていることはまずない。
彼が人間だとすると、一体なぜ閉鎖された扉から出てきたのか、あの重厚な扉をどうやってこじ開けたのか、そもそもなぜアヒルの被り物をしているのか、エルティアの脳裏を幾多の疑問が駆け抜ける。
しかしひとまずそれらを脇に置き、彼女は叫んでいた。
「あ、危ないっ！　アークドラゴンです！」
アヒル人間が現れたのは、ちょうどエルティアとアークドラゴンの中間くらいの位置。
さすが最強種と言うべきか、いきなり目の前に登場した謎のアヒル人間に戸惑う様子もなく、鋭い牙を剥いて躍りかかったのである。
「グルアアアッ！」
「おっと」
アヒル人間はアークドラゴンの顎を片手で受け止めた。
「へっ？」
思わず頓狂な声を出してしまうエルティア。
「なんだ、上層に出てくるような雑魚竜か。よっと」
さらにアヒル人間がアークドラゴンの下顎を蹴り上げると、信じられないことにその頭部が跳ね上がり、天井にめり込んでしまった。
そのまま絶命したのか、ピクリとも動かなくなるアークドラゴン。
「あ、アークドラゴンを……瞬殺……わ、私は……夢でも見ているのでしょうか……？」

◇　◇　◇

扉を蹴り飛ばすと、新たな通路に出た。かなり広い、しかも荘厳さを感じさせる美しい通路である。どうやらボスの部屋というわけではないらしい。
「あ、危ないっ！　アークドラゴンです！」
突然の声に反応すると、そこにいたのは外国人らしきプラチナブロンドの美少女だった。
えっ、ダンジョンの中に人間……？
まさか俺以外にもこのダンジョンを探索している人がいたなんて……と驚くが、それよりも今は彼女が注意喚起してくれた反対側だ。
「グルアアアッ！」
「おっと」
狂暴な牙の並ぶ巨大な顎が迫っていた。
ドラゴンだ。
「なんだ、上層に出てくるような雑魚竜か。よっと」
幸い最弱クラスのドラゴンだったので、片手で顎を抑え、そのまま思い切り蹴り上げてやる。
ドラゴンは天井に頭からめり込んでしまった。
「あ、アークドラゴンを……瞬殺……わ、私は……夢でも見ているのでしょうか……？」
視線を戻すと、先ほどの外国人美少女がわなわなと唇を震わせていた。
もしかして今のドラゴンに襲われていたのだろうか？　よく見ると、彼女の仲間なのか、後ろに何人か倒れている。
だがここは地下 100 階。ここまで辿り着けるのなら、あの程度のドラゴンに苦戦するとはとても思えないのだが。
「え、エルティア様っ……危険です……っ！」
そのとき倒れていた仲間の一人が訴えた。どうやらこの外国人美少女はエルティアという名前らしい。しかし「様」付けで呼ばれるなんて、名家のご令嬢とかだろうか？
「早くその得体の知れない生き物からお離れください……っ！」
得体の知れない生き物って……。
怪しい者ではないことを示さなければと、咄嗟に取り出したのは名刺だった。
「わたくし、こういう者でして」
日本ほど重要なビジネスマナーではないかもしれないが、海外にも名刺を渡す文化はあるそうなので、少なくとも俺がまともな社会人であると理解してくれるに違いない。
しかしそんな俺の期待も虚しく、外国人美少女は名刺を受け取ろうとすらしてくれなかった。
宝石のような碧眼で、じっと俺の顔を見つめてきている。心なしか、少し頬が赤らんでい

るような気もするが……。
〈そのマスク姿が怖いんじゃ？：コヨーテ〉
〈僕らは見慣れているので大丈夫だけど：破壊神〉
〈めっちゃシュールですしねぇ：さとうとごはん〉
「おっと、それはそうですよね。マスクのこと忘れてました」
　頼もしい視聴者コメントに教えられて、俺は慌ててマスクを脱ごうとする。身バレ防止用だが、どうせ３人しか見ていないし、今は目の前の女性を安心させる方が重要だろう。
　だがマスクを脱ぎ捨てる寸前、外国人美少女がぼそりと呟いた。
「か……かわいい……」
「え？」
「そのマスク……アヒルさん、ですよね？」
「あ、ああ、そうだが」
　戸惑い気味に頷くと、彼女は目を輝かせた。
「やっぱり！　とってもかわいいです！」
「っ、そうだよな！　このアヒル、めちゃくちゃかわいいよな！」
「はい！　すっごくかわいいです！　私も被りたいくらいです！」
　急に意気投合してしまった。
　この子、良い子だな。アヒル好きに悪い子はいないというのが俺の持論だ。
〈そっちだったか：コヨーテ〉
〈二人とも独特のセンスｗ：破壊神〉
〈感性は人それぞれですしね、うん：さとうとごはん〉
　とはいえ、さすがにこのマスク姿のままでは、後ろの仲間（？）たちが警戒を解いてくれそうにない。今も鋭い目つきでこっちを睨んでいるし。
　俺は今度こそアヒルマスクを外した。
〈ヤマダさんの素顔はじめて見た：コヨーテ〉
〈30 代って聞いてたけど若く見える：破壊神〉
〈仕事できそう：さとうとごはん〉
「山田昇二と申します」
　名乗りつつアヒルマスクをインベントリに仕舞うと、外国人美少女はちょっと残念そうな顔をしたが、すぐに神妙な顔つきになって、
「私は聖ミケルア王国の第二王女、エルティアと申します。先ほどは助けていただき、本当にありがとうございました」
「聖ミケルア王国？」
　どうしよう、まったく聞いたことがない。まぁでも世界は広いから、きっと俺の知らない名前の国だってあるはず……と半ば現実逃避する俺だったが、
〈これってまさか：コヨーテ〉

〈そのまさかかも：破壊神〉
〈すごい展開になってきましたね：さとうとごはん〉
　うん、やっぱり常連さんたちもその可能性に思い至っているようだ。
　――どうやら俺、庭のダンジョンをコツコツ攻略し続けていたら、異世界に辿り着いてしまったらしい。

　その後、異世界の国の王女様から、ぜひお礼をしたいので儀式とやらが終わるまで待ってほしいと言われたが、
「さすがにそろそろ帰らないといけないんで。明日も仕事ですし」
　と丁重にお断りし、俺は元の世界に戻ることにした。
「ではせめてこちらを……っ！　王宮を訪ねてこられたときはこれを見せてください！」
　去り際、王家の紋章が刻まれているメダルを渡された。王宮の衛兵にそれを見せれば、どうやら彼女との謁見ができるらしい。
　そうしていつものように転移魔法で地下１階に飛んだところで、
「今日の配信はここまでとなります。見ていただきありがとうございました」
〈次回からは異世界編？：コヨーテ〉
〈それは楽しみ：破壊神〉
〈ワクワク：さとうとごはん〉
「そうですね。ちょっと来週は仕事が忙しくてどれだけ配信できるか分からないですけど、あの世界を少し探索してみようと思います。ではでは」
　そうして配信を終了し、我が家の庭へと出る。
　と、そこで俺はあることに気づく。
「あれ？　この王女様に貰ったメダル……ダンジョンから出ても消えないんだな」

「山田さん、ニュースご覧になりました？」
　翌日、いつものように会社に出社すると、派遣で来てくれている女性が声をかけてきた。
　二十代半ばの若い子で、人懐こいタイプらしく俺にもよく話しかけてくる。
「ニュース？」
「え、もしかして見てないんですか？　昨日の夜あたりから、あちこちで凄い話題になってますよ」
「ちょっと昨日は疲れてて、早く寝たんだよな。どれどれ」
　それは世界各地に同時多発的に謎の穴が出現したというニュースだった。
【内部で謎の生き物を発見！】【ファンタジーに登場するモンスターと瓜二つ？】【まさかダンジョンか？】などといった衝撃的な文言が並ぶ中、写真まで掲載されていて。

写っていたのはゴブリンだった。
「……マジか」